

まちの宝物 (10) 四階楼 (しかいろ)

室津地区の中心地に建つ、国の重要文化財「四階楼」。漆喰(しっくい)の白壁と4階の窓にはめ込まれたステンドグラス、建物の内外の装飾に用いられている鍍絵(ごてえ)＝鍍で作った立体的な装飾)などが特徴的です。和洋折衷の疑洋風木造4階建の高層建築物で、日本に現存しているのは四階楼が唯一のものだそうです。

◎四階楼は誰が何のために建てた？

四階楼は、室津村で回漕業や汽船宿を営んでいた小方謙九郎(おがたけんくろう)が、明治12年(1879年)に当時の金額で三千円をかけて建てました。棟梁は地元室津の吉崎治兵衛です。

当初は、小方の住宅兼店舗、汽船宿として、取引先の人々や船主らを商売上もてなすために利用されていました。



国の重要文化財に指定されている四階楼

◎四階楼の特徴を見てみよう

四階楼は文明開化の香りを漂わせる4階建ての擬洋風建築です。擬洋風建築とは、西洋の建物を見聞した日本の大工が、自分達の技術で西洋の外観などを模した和洋折衷の建物をいいます。つまり、外見は洋風であっても中身は木造で和風に建てられています。

四階楼の四隅の柱は1階から4階まで貫いており、棟高は約11メートルです。

外観は白漆喰塗り、屋根は寄棟造(よせむねづくり)の棧瓦葺(さんがわらぶき)、1階の正面入口にはアーチ型の洒落た玄関庇(ひさし)、2階の軒庇(のきひさし)には垂れ壁を付け、四隅にはコーナーストーン型を漆喰で作っています。

4階の四隅には昇り龍、2階の垂れ壁には牡丹などの鍍絵が施されています。

また、内部の壁にも菊水や唐獅子牡丹



建物の四隅にはコーナーストーンを模した装飾



入り口は英国風のおしゃれなアーチ型の庇(ひさし)です



3階の8畳の間の壁には「唐獅子牡丹」の鍍絵

さらに4階の天井中央にも鳳凰の鍍絵が施されています。

4階は大広間になっていて、四方の窓にはフランス製のステンドグラスが短冊状や三角状に入れられており、差し込む太陽の光の強さや角度によって、床に映し出される光の色や形がさまざまに変化します。



4階の大広間
天井中央の見事な鳳凰の鍍絵とステンドグラスの窓から差し込む光が不思議な空間を作り出しています



4階隅柱の昇り龍と雲の鍍絵
水神と言われる龍と、雨を呼ぶと言われる雲で、火事避けのためだったと思われる



2階から4階までは芯柱を中心とした回り階段で昇っていきます

◎四階楼の歴史

明治12年に建てられた「四階楼」は、小方謙九郎の営む汽船問屋「佐波屋(さわや)」の店舗や宿として使われていたが(四階楼のてっぺんの鬼瓦には佐波屋の

「さ」の文字が入っています)、その後、大正14年に旅館「四階楼」となり、昭和32年から平成3年までは旅館「四海荘」として利用されていました。

平成3年に上関町に寄贈され、町の所有となりました。平成5年に山口県指定有形文化財に指定され、再び「四階楼」と称して上関町教育委員会が施設管理を行ってきました。平成10年から12年にかけて保存修復工事が実施され、平成17年に国の重要文化財に指定されました。

◎小方謙九郎について

小方謙九郎は都濃郡栗屋村(現在の周南市栗屋)の庄屋・温品良左衛門の二男として生まれ、25歳の時に室津村の小方家の養子となりました。幕末期には高杉晋作が結成した奇兵隊に入隊し、第二奇兵隊の参謀として活躍。維新後は室津に帰り、回漕店や汽船宿などを営む一方、室津村の第一回村会議員を務めるなど、郷土発展に尽くしました。



室津の日和山公園の近くに小方謙九郎のお墓と碑が建っています

※四階楼に隣接して、上関町郷土史学習館が建てられています。係員の方が四階楼の中を丁寧に案内してください。

●四階楼および郷土史学習館

- 【入館料】無料
- 【開館時間】10時から17時
- 【休館日】月曜(祝日は開館)、年末年始
- 【電話】0820-62-6040



◎「わいわいタイムス」10月号は10月5日(日)発行予定です。